

# 末黒野

すぐろの

3月号 (通巻763号)

末黒野

昭和二十八年十月八日第三種郵便物認可(毎月) 五日発行  
平成二十二年三月五日発行 第六十五巻第三号

(通巻七六三号)



# 番ひ鴛鴦

小川玉泉

一と電車見送り駅の菊花展  
磴険し紅葉時雨に息を呑み  
柏楨の萌黄の冬芽建長寺  
冬もみぢ白亜におはす露坐仏

風に鳴き敗荷の影定まらず  
小春日や泊船の生む槌の音  
おでんの火弱めぬ窓を叩く風  
腰疼く日や寒空の鳶の笛  
谷戸奥の池深閑と番ひ鴛鴦  
遠富士の裾まで雪や蒲団干す  
凶書室の静けさ破り冬の鴝  
碩学悼野間一典様の君でありしを実南天

# 果ては海

松本三千夫

目つむりて耳さとくをり日向ぼこ  
折鶴の羽根の鋭角夜半の冬  
紐引いて灯を消す寝間の寒さかな  
幕間のさざめきのごと冬木の芽  
雪よりも穢れなき白冬牡丹  
枯木星つぎつぎ人に追ひ越され  
艦の灯の海へこぼれて風冴ゆる  
ころころと笑ふ客まろっど竜の玉  
大根畑ゆっくりうねり果ては海  
ちり鍋や俄か奉行の饒舌に  
とぐる巻くホースや寒をからませて  
ポケットに入るる夢なし枯野道

# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

紅葉且つ散る

小倉正穂

冬の月

乙坂きみ子

ゆく秋や鎌倉までの切符手に  
沈みゆく日に溶け合へる山紅葉  
紅葉且つ散るや筒なき万華鏡  
悠々と鳶が輪を描く冬日和  
日に紛れ空に紛るる返り花  
枯蓮の冥き水面に日の光り  
師の逝きし日は白紙なる古日記

月冴ゆる亀甲しるき松の幹  
煎葉の匂ふ霜夜の厨かな  
段畑を隈無く照らし冬の月  
冬晴や漕ぐ手におくれ艫の軋み  
渡し舟着く枯葦を折り伏せて  
独り来て海を見てゐる冬至かな  
夕刊の来るころ声の冬鴉



師走満月 菅野日出子

山茶花や塵一つなき法の庭  
金粉のごとき落葉や大落暉  
水門の落葉の嵩や雲迅し  
山峡の湖にせり出す冬紅葉  
短日や浮灯台の灯の淡し  
明あかと師走満月見てあかず  
客足の遠き町並聖夜の灯

雪しんしん 菅野蒔子

おくれ雁入り隊列ととのひぬ  
針運ぶ窓いっぱい冬日ざし  
登校の一人が見つげ冬の虹  
霜白し更地になりし家二軒  
背の寒しひとり風呂の火あやしみて  
さびしいは禁句の筈や雪しんしん  
百姓のなごりの手足ちゃんちゃんこ

冬晴 木下和代

林中に満つる鳥声照紅葉  
ビル風や木の葉の渦に搦められ  
冬晴れの空を撫でをり象の鼻  
冬天や皇帝ダリア競ひ咲く  
散り敷きて櫛落葉の道やさし  
風冴ゆる山の稜線威を正す  
衰へは足より覚ゆ日向ぼこ

小春風 熊切光子

内海を出づる一帆冬初め  
上げ潮の運河まばゆき小春かな  
小魚のあまた跳ねをり枯蓮  
忽然と廻る水車や山眠る  
近ぢかと鴉来鳴けり小春風  
罅はしる円空仏や冬の鵞  
大寺の不開の門や笹子鳴く

# 青炎集

## 小川玉泉選



横浜 石黒興平

横浜 岡野里子

頂へ風を押し上ぐ芒波

火祭の風は炎となりて立つ

ラ・フランスの形損なはず剥きにけり

阿羅漢の破顔や紅葉かつ散りぬ

ト口箱の稲穂の垂るる米屋かな

法螺の音の渡る四方の山眠る

甌穴の落葉溜りとなりにけり

凍天へ火祭の護摩音立てて

冬浪に船脚重き舳かな

冬紅葉つむり艶けき撫で仏

段畑の農具小屋古り水仙花

赫赫と大空を呑む冬落暉

横浜 中野久雄

横浜 高橋明

川筋の風やはらかや冬木の芽

起き出でて襟かき合はす今朝の冬

朝なさな歩む抜け道八手咲く

吾が庭にあらぬ落葉を掃きにけり

垣越しの話弾みぬ小六月

朱雀門朱のさびさびとしぐれけり

参道の踏むを躊躇ふ散紅葉

括られて形を正しぬ冬の菊

S Lの尾を引く汽笛山眠る

片足をのせて余りぬ朴落葉

枯れきつて松風騒ぐ砦跡

けもの径踏みこむ肩に落葉かな

横浜 内藤庫江

砂利蹴つて袴に靴の七五三  
総門に日の丸掲げ時頼忌  
冬満月ベイブリッジを行く汽笛  
冬空に大鐘を撞く龍口寺  
枯葉舞ふ銀座通りの石畳  
迷ひつつ又一年の日記買ふ

横浜 戸田澄子

笹鳴きの途切れとぎれや風の中  
落葉踏むために入りけり雑木山  
悔いあまた空白あまた日記果つ  
歳晩や慣れぬ手つきのためこ焼屋  
山映す池の余白や浮寝鳥  
枯木には枯木の威風大櫓

横浜 太田良一

二枚舌三枚舌の冬籠  
炬明りや白狐出でてふ那須の里  
篠山や母系の里の牡丹鍋  
冬薔薇病みて家族の絆知る  
銘酒酌む腹からしかと冬用意  
鮫鱧鍋再会信じ別れけり

横浜 小池みな

二の酉や孫と分け合ふもんじや焼  
トランプを散らかすばかり七五三  
小春日てふ眩しき一日なりにけり  
柿の葉のちりぬる我が世つねならず  
黄昏の翳りを縫へり鴨の声  
新しきうちは馴染まず冬帽子

新宿 稲垣佳子

抜け道をせばめ八ツ手の花はじく  
放射状のひかり際立つ枯木立  
滑空の様に池へと桐一葉  
豆腐屋のがんこも老いて日向ぼこ  
弾みつけもぐる鳩鳥夕茜  
裏山の道を埋むる落葉風

横浜 堺昌子

風に散り風のあらぬに散る紅葉  
今年はや和紙の寅折る年用意  
緞帳のとばりそのまま紅葉山  
枝移る笹鳴きに目を凝らしけり  
里山の静寂をやぶり冬の鵲  
鳥声と落葉踏む音柞山



# 耕 土 集

## 松本三千夫選



自然薯の長さに添木され届く 横 浜 神谷さうび  
ものを言ふ機械の指図文化の日  
午後の日の窮りに石路の花明り  
柵の香に知る花の盛りどき  
冬日和嬰はとろりと膝の上

電飾や落葉つくせる並木道 横 浜 斉藤 雅子  
冬紅葉色を極むる天狗山  
文机に本積みしまま十二月  
交差点マスクの群の押し寄する  
寒雷を逃ぐる術なし骨恐竜

冬暖か山と積まるる植木鉢 中島ひろし  
扁額の読めぬ山号冬近し  
山茶花を散らして帰る検針婦  
剥けば悔羅漢顔なるラ・フランス  
松手入降りて離れて眺めては

夫と子を待つとはなしに重ね着て 上月 智子  
さ緑の葉の香り立つ蕪汁  
雉子鳩の番寄り添ふ片しぐれ  
银杏散る社の屋根の避雷針  
新海苔の淡き香りの売られをり

秩父路の札所や厚き霜柱 草 加 泉 和美  
人を待つ五百羅漢や山眠る  
銭湯に行く煤逃げの老爺かな  
年詰る彌宜の白足袋やや汚れ  
数へ日の電話用件のみの友

山小屋に薪割る音や冬うらら 及川 照子  
軒高く年木を積みて山の宿  
炭焼きの煙の中や峡の村  
頑なに手書き貫き賀状書く  
八十路まで生きむと五年日記買ふ

小春日やつがひ雀のペランダに 横 浜 長尾 良子  
霜晴や山々迫り来る朝

夕支度面取大根湯気の中  
マンションの窓に電飾クリスマス  
夕映えや土塀を越して枇杷の花

自然薯の山の匂ひのまま届く  
根本 公子

すりこぎを廻すリズムやとろろ汁  
色鳥や背中に堅き考の椅子  
淋しさや木の実しぐれを出でてより  
瀬川を覆ひつくせり枯尾花

竹村 清繁

風音のをりをりとどく霜夜かな  
少しづつ透明になる寒さかな  
煤逃げのならぬ手順となりにけり  
やはらかき影を支へに帰り花  
枯菊のなほ日を欲りてをりにけり

藤田千枝子

葉牡丹の縮れに宿る雫かな  
病身の妹に寄り添ふ霜夜かな  
節くれの指しみじみと柚子湯かな  
裸木の瘤のあらはや獣めく  
片隅の粗乃木にやさしき冬日かな

山粧ふダム湖は銀の光撥ね 川 崎 滋野 暁  
玻璃細工めく霜柱大菩薩  
柗の花散り初むや喪の知らせ  
寄りそひて立つ穂や冬の花蔵  
冬紅葉水琴窟の音沁みて

音符めく鄙の軒下つるし柿 横 浜 数見 清子

銀杏黄葉描く画伯と豆画伯  
ビル風や銀杏落葉は風の的  
庭先や干大根の日のぬくみ  
空白の日もある齡日記果つ

鈴木 英男

枯葉舞ひ月影乱る石畳  
凍て道や苦あり楽あり我が家の灯  
せせらぎの光に揺れて冬すみれ  
木枯の吹きぬけて行く無人駅  
吊橋や谷間につづく冬もみぢ

細島 孝子

鳥渡る海の光を曳きながら  
秋の声嵯峨の青竹ひびき合ふ  
筆太の屋号染あげクリスマス  
手土産に都民の森の蕪を買ふ  
伊豆沼に白鳥の群れ深ねむり